

ベリンスキーにおける國民性の概念

金子 幸彦

ヨーロッパのロマン主義文學のなかで、古典主義の理論の抽象性、非歴史性にたいする反動として生まれた、

文學と民族生活とのむびつきの思想、一般に民族的なものへの文學の關心は民族の歴史的過去の理想化を媒介としている。ロマン主義者たちは資本主義的市民社會の諸條件が創造と美との精神を亡ぼしているものとして、これに中世の家父長的生活の諸條件を對立させた。そして中世には藝術行動が、たとえば歌や踊りをとともなう祭りや、多分に藝術的な要素をもつ職人たちの労働に見られるように、社會生活の缺くことのできない部分を構成しているものと考えて、民族的な、あるいは國民的な詩の創造の道を過去の時代の思想や感情や藝術様式の人爲的な復活のなかに求めたので、このことは彼らによる民族

文化の傳統の擁護が文學と現實の國民生活とのむすびつきを弱める結果をもたらす原因の一つとなった。

ロシアにおいても、とりわけその後期のロマン主義についてこの共通の現象が見られるが、この國の文學の發達過程は國民性 (narodnost) の問題にも、ほかの國の場合とは若干ちがった性格をあたえている。ロシアの封建的な運動において主導的な役割をはたしたのが貴族階級のインテリゲンツィヤであり、この運動の社會的地盤を提供したものが農民であったという事情と、さらにヨーロッパ諸國のロマン主義が多くの場合に市民革命のうちに生まれているのにたいして、ロシアではそれが國民的、民族的自覺の昂揚期に成立し、ちょうどカルボナリズムやリソルジメントとむすびついたイタリア・ロマ

ン主義の場合とおなじように、反封建的運動たるデカブリスト運動とむすびついていいたという事情とによって、ロシアのロマン主義においては、個我の問題への關心が比較的よわく、社會的な問題への關心がつよく現われることになる。このことの結果として、ロシアでは國民性的の問題はなによりもまず、文學の民族的自主性的の問題としてとりあげられた。

一八二六年以後の政治的反動期には、文學における非社會的傾向とベシミズムの成長のための條件がつくられてゆくが、一方では追放のデカブリスト文學者たちの活動がつづけられ、またゲルツェンやレールモントフらの若い作家がロマン主義の作品を書きはじめていたので、三〇年代のロマン主義の主流はまだ革命にたいする反動ではなく、ニコライ的現實にたいする抗議の性格をもっていた。四〇年代になってはじめてスラヴ主義的ロマン主義が形成されて、これがすでに退潮期にはいったロシア・ロマン主義の主流となつて、市民的、民主主義的志向および社會主義的志向にたいする抗議の形をとるようになる。しかしスラヴ主義者は主觀的にはニコライ一世

の政治をも農奴制をも支持したわけではなく、ロシアの救済の道を過去への復歸のなかに求めたのである。

十九世紀の二〇年代に國民性はすでに基本的な美學的概念の一つとなつて、プーシキンの言葉によれば、「國民性について語つたり、國民性を要求したり、國民性的の缺如を非難したりすることが習慣となつた。」しかもそれはさまざまの意味に理解された。

ロシアで文學の國民性について出版物の上ではじめて語つたのはデカブリスト派の詩人たちである。一八二四年にキユヘリベッケルは「ムネモジナ」誌上で自由な國民的な詩の創造について書いている。「ロシアの名譽のために眞のロシアの詩が創造される。ロシアは市民的の世界においてばかりではなく、精神的の世界においても第一の強國となるだろう！ 父祖たちの信仰、祖國の習慣、年代記、民謡と民話——これらはわが文學の最良の、最も純粹な、最も確實な源泉である。」おなじような思想はベストウーージェフ・マルリンスキーにも見いだすことができる（一八二四年度および一八二五年はじめのロシア文學）。彼らは文學における國民的自覺と民族的自主性

を要求し、古典主義におけるギリシャ・ローマの文學への、また外國の文學、とりわけフランス文學への模倣の志向にたいする批判として、ロシヤの歴史的過程——文化的遺産として、また取材の源泉として——への關心とともに、デカブリストの政治的プログラムにもとづいた、形式、内容、普及における文學の民主化を主張した。しかし彼らはデカブリズムの思想を媒介として、歴史のなかに例外的な英雄的な主題を追求していたので、たとえばブーシキンの「エヴゲーニイ・オネーギン」の第一章が出版されたときにこれをその主題の日常性のゆえに非難したルイレーエフの見解にも現われているように、寫實主義への直接の志向をもたなかった。

デカブリスト派に近いヴィヤーゼムスキーはロマン派の宣言書の意味をもっていたその「出版者と古典作家との對話」(一八二四)において、國民性というものは詩學の規則のなかにではなく、感覺のなかにあるものであって、國民性、地域性の刻印は作品の重要な價值を構成するものだと述べている。

リュボムドレイ派のヴェネヴィーチノフは國民性の

ペリンスキーにおける國民性の概念

理解をさらに發展させて、國民性が、ある特別の側面に屬する状態のなかに反映するのではなく、一つの國民の精神によって生きる詩人の感覺そのもののなかに、いわば詩人の發展、成長、個性のなかに反映するものであって、國民性の概念を國民的習慣の表現と混同してはならないと主張する(一八二五、「ボレヴォーイのオネーギン論にたいする批判」)。しかしヴェネヴィーチノフはシエリングのロマン主義の土臺の上で問題を考えているので、國民性の概念は抽象的な「國民精神」のわくのなかから出ることができなかった。

ブーシキンは一八二四年ごろ國民性についての短い文章を書いた。これは彼の死後に發見されたものであるが、ここで彼はこの問題についてすぐれた洞察を示している。ここにはのちにペリンスキーが發展させたところのいくつかの問題が出されている。「わが國の批評家たちの一部の者は國民性は祖國の歴史に取材することであると考えているように見える。また他の者は國民性をこ」とばのなかに見て、ロシヤ語が話されロシヤ式の表現が用いられていれば喜んでゐる。しかし「オセロ」や「ハ

ムレット》を書いたシエクスピアからその高い國民性の價値をとりあげることが困難であらう。ヴェガやカルデロンは地球のあらゆるところに舞臺を移動させ、イタリヤの小説やフランスの歌物語に自分の悲劇の題材を求めている。アリオストはシャルルマーニュやフランスの騎士やシナの皇女を讚えているし、ラシーヌの悲劇は古代史に取材したものである。しかしこれらすべての作家のすぐれた國民性の資質を疑うことはむづかしいだろう。……作家の國民性というものはその同國人によつてのみ完全に尊重されるが、他の者にとっては存在しないか、あるいはむしろ缺點とさえ思われるような資質である。……氣候、政治形態、信仰はおのの國民に特殊の相貌をあたえる。これは詩の鏡のなかに多かれ少かれ反映する。考え方や感じ方というものも澤山ある。」(一九四九、全集七卷、三八—四〇)この文章の中心的な思想は國民性というものは國民の個性の表現であつて、作家が外國の生活に取材した場合にも、そこに國民の個性が表現されているならば、それは國民的であるという思想であ

る。ゴッゴリもこれとほぼおなじ考えを述べている(一八三四、「プーシキンについての數言」)。

スラヴ主義者たちは文學の國民性の問題において、ロシアの歴史的進路の獨自性とピョートル一世の改革以前の中世的ロシアの理想化から出發して、文學の民族的獨自性の理念を主張した。それは第一に古代ロシア文學の作品の最大限の利用、他民族の文化からの隔絶、第二にロシアの農民意識の特徴と民衆生活との理想化という形をとつた。これは實際にはロシアの進歩、國民の啓蒙と國民生活の改善の道とをさすものであり、ロシア・ロマン主義がその國民性の追求において國民生活との現實的なむすびつきを失うのはこのスラヴ主義の段階においてである。

ペリンズキーにおける國民性の概念は初期ロマン主義者の見解を發展させつつ、プーシキン、ゴッゴリの作品をはじめとするロシア文學の成果の上に、またこの問題をめぐるスラヴ主義者との論争を通じて形成され、彼の文學理論の中心となる。彼はロマン主義を外國からの借りものであるが、同時にロシアの文化意識の發

展の一段階として歴史的な必然性をもったものと考えていた。それゆえジュコーフスキーを、ロシアにロマン主義を導入しロシア文學のなかに優美なものの感覺を育てた詩人として、高く評價し、「このロマン主義の要素なくしては現代のいかなる詩も不可能である」と述べている(一八四二、「一八四一年のロシア文學」)。四〇年代になって彼が批判するのは現實との分裂を來し、生活のそとに生きようとして、生活への創造的態度を失ったと彼が見なしているところのスラヴ主義的ロマン主義と町人的ロマン主義である。

ナデージダンの反ロマン主義的な思想のつよい影響のもとに書かれた、その最初の論文「文學的空想」(一八三四)において、ベリンスキーは、ナデージダんとともに、古典主義とロマン主義との統一からあたらしい文學が生まれるものと期待しているが、ロマン主義を反美學的現象としてのみ見るナデージダンの立場の抽象性には同意しない。ここでベリンスキーは國民性を國民的相貌の特徴、國民精神および國民生活のタイプと規定している。これはロマン主義者による定義とあまりちがわない。し

ベリンスキーにおける國民性の概念

かしロシア文學における國民性の現われを具體的に分析する場合には、彼は「ロシア生活の情景の描寫の眞實さ」のなかにそれを求める。つぎの年には彼による國民性の理解はより明確な形をとる。「あらゆる國民の生活は自己の個有の形式のなかに現われる——したがって、もし生活の描寫が正しければ、それはまた國民的である」(「ロシアの中編小説とゴロリ氏の中編小説」)。

しばしば指摘されているように、初期のベリンスキーの批評論文は多くの矛盾をふくんでいる。そこには現實的なものの合理性についての思想と現實の非合理性を描き出している作品にたいする高い評價とが共存している。「文學的空想」のなかで彼は藝術が自己のほかに目的をもっていないという思想を述べているが、この論文の中心的思想の一つは藝術が「時代と國民の反映」であり、そのためには藝術は生活があるがままのすがたで描かなければならないという思想である。すなわち詩人は生活のすべての問いにこだまのようにこたえて、作品のなかにすべてを正しく反映させなければならぬし、さらにその民族は人類の生活のなんらかの側面を表

現すべきものであるから、文學は國民精神の表現者として世界文化のなかに自己の民族の歴史的意義を顯現するための大きな使命をもっているということである。

ペリンスキーによれば理想の文學は國民の精神生活、自己意識の表現であり、象徴であるような文學であるが、過去および現在のロシア文學の缺陷の原因は社會と國民との分裂にある。彼は社會を國民と區別する。社會とはもともと教養ある人々のえらばれた集團であり、上層の諸階級である。國民は住民のその他の層である。ピロートル一世の改革の結果として國民と社會とはたがいにひきはなされて、別々の方向にすすんだ。國民はむかしからのその粗野な、半ば野蠻な生活と自己のくらしい歌とを保持しつづけたが、社會はいちじるしい變化をとり、外國の模倣に熱中し、すべてのロシア的なものをわすれ、ロシア語で話すことをさえわすれた。ロシア文學は國民の自己意識、國民精神の表現ではなく、社會の上層の一部の利益にのみ奉仕した。國民大衆はロシアの作家たちを知らず、作家もまた國民にとってゆかりのないものであった。「文學的空想」における「わが國に文學

はない」というペリンスキーの結論は、このような判断から出ている。しかしこの結論は彼がおなじ論文のなかでデルジャーヴィン、クルイロフ、グリボエドフ、プーシキンの創作に大きな意義をあたえていることと矛盾する。彼はこれらの作家の出現を偶然的な現象と見ている。しかしその後の論文では彼はロシア文學の發達過程の合法則性をみとめ、ロシア文學が、なによりもまずプーシキンの創作を通じて、外國文學への模倣を克服し、その國民的自己意識を表現する独自の文學をすでにもっていることを主張する。

社會に對立させることによって國民は階級的な概念としてとらえられるわけであるが、ペリンスキーは文學が直接に國民自身によって創造されるべきものとは考えない。のちに見るように、彼は口傳文學には限定的な價值しかあたえていない。彼は作家が國民的であるためには現實を正しく描くことが必要であり、このためには作家が國民の生活、國民の立場に近づくこと、すなわち國民と社會とのむすびつきが必要であると考えている。これは作家の主觀性の問題、文學の思想性の問題と關係をも

つ。このように見るならば、ペリンスキーの最初の論文のなかで、のちに彼の文學理論の基本的な要素となる國民性、現實性、思想性の三つの原則が、いくつかの矛盾をふくみながらも、初源的な形でとりあげられていることがわかる。

彼はなによりもまずプーシキン、ゴーゴリの創作活動の成果の上に立って、自己の文學理論をうちたてたのであるが、右に見たように、彼がすでに一八三四年の論文で自己の文學理論の原則的な問題をとりあげていることは、そのころすでにプーシキンの創作のなかでこれらの問題が提出され、基本的に解決されていたことと關係がある。ペリンスキーはその後の諸論文を通して、これらの原則に最大限の民主主義的な内容をあたえることによって、自己の文學批評の規準、文學史の體系、寫實主義の文學理論をきずいて行った。

ロマン主義者によって提出された文學の民族的自主性の問題はペリンスキーによってなによりもまず國民精神の表現の問題として理解され、模倣性の克服の問題は彼の國民性の概念における中心的な問題ではない。模倣性

ペリンスキーにおける國民性の概念

の問題を彼は二つの面から見ている。すなわち、第一にロシア文學はプーシキンの創作を通じてこれをすでに解決している。第二に模倣は過去のロシア文學にとって必要なものであった。彼によればプーシキンは一八一二年の戦争の勝利につづく國民の民族的な誇りと自覺、民主的な志向の高揚と人間愛の精神を表現し、またそのための、言葉をもふくめた、ロシア的な、独自の形式を完成したのである。この規定は今日でもプーシキンの作品の理解の基礎となるべきものであろう。しかしペリンスキーはロシア文學にとって形式の模倣を歴史的に必要な段階と考え、しばしば十八世紀ロシア文學の模倣的性格について語っている。すなわち、ロシア文學は西ヨーロッパの文學からその形式を借りてこれをロシア的内容とむすびつけようとした。ここにピョートルの改革以後の文學の發達過程の歴史的意義がある。そしてプーシキンの創作によってロシア文學は眞にロシア的な内容と形式をもつようになる。

ペリンスキーによれば、いずれの國の文學もその歴史的發展の一定の段階に發生するが、それが直接に口傳文

學から成長する場合と、形式と方法を他國の文學から借りる場合とがあり、ロシア文學はこの第二の過程をたどった。「ロシア文學がほかのすべての文學と異っている點は、それが獨立的に、かつ國民生活の地盤から直接に發生したのではなく、急激な社會的改革の結果であり、人爲的な移植の果實であつたといふことにある。それゆえにロシア文學は最初において模倣的な、修辭學的なものであり、内容の貧しい、生命力のとほしいものであつた。……しかしピョートル大帝の人爲的改革の生命にあふれた、ゆたかな成果はほかの領域におけるよりも文學の領域においてもっともいちじるしく現れた。」(一八四二、「文學といふ語の一般的意義」^(四))そして、ペリンスキイはこのことはヨーロッパにおけるロシアの歴史的、地理的位置と、それによって規定された、ロシア民族の、外國文化をとりいれるすぐれた攝取能力によるものと考へている。

西ヨーロッパ的啓蒙の必要を確信していたペリンスキイが、民族文化の閉鎖性と孤立化を志向するスラヴ主義者との論争においてこのことをくり返し主張しなければ

ならなかつたことは理解しうることである。その晩年の論文においても彼は、外國文化をとりいれることがロシア文化の民族性をそこなうと主張するスラヴ主義者の見解を批判して、歴史上のすべての強大な民族が前代およびまわりの民族の文化を借用し、とりいれて、すこしも自己の民族性をそこなうことなく、自己の文化を完成してきたことを立證しつつ、つぎのようにのべている。

「もともと人間のものと民族的なものとのたまたかといふものは修辭學上の比喩的表現にすぎない。實際にはそのようなものはない。一つの國民の進歩が他の國民からの借用を通じて行なわれる場合にも、その進歩は民族的に完成されるのである。さもなければ進歩はない。」(一八四七、「一八四六年のロシア文學觀」)このことは正しい。しかし、外國文化を自主的にとりいれることと模倣とは區別されなければならないであろう。ピョートル以後プーシキンにいたるまでのロシア文學の歴史をもつぱら模倣の歴史としてのみ見るペリンスキイの見解は文學史の事實と一致しない。しかもそれは藝術の形式と内容との統一についての、また十八世紀の若干の作家の意義

についての、彼自身の見解とも矛盾する。だがその後も彼は十八世紀ロシア文學の模倣的性格についての自己の見解を變えなかった。

スラヴ主義者やブルガーリン、ポゴーチンらのいわゆる「町人的ロマン主義者」は國民性をもっぱら民族的な規準として、いわば内側からのエクゾチズムとして、またロシア國民のおくれた意識、庶民性 (prostonarodno-sť) として理解した。ペリンスキーは國民性と庶民性とのこのような混同につねに反對している。すでに「文學的空想」のなかで彼はデルジャーヴィンの作品の特質がその國民性にあることを指摘して、「この國民性とは百姓言葉をとりあげることでもなく、民謡や民話の調子をむりにまねることでもなく、ロシア的知性の曲折やロシヤ的なものの見方である」と語っている。

一八三六年の論文では彼は國民性を國民の個性、國民生活の精神の表現として規定し、「詩人は才能をもち、眞の詩人であるなら、國民的ならざるを得ない」と述べる。なぜなら、ペリンスキーによれば、詩人は人間一般であるまえに、ロシア人、フランス人、あるいはドイツ

ペリンスキーにおける國民性の概念

人であり、自己の社會の獨自の諸條件、獨自の生活的、文化的傳統のなかにそだち、自分の祖國を愛し、祖國と喜びや悲しみを分かたなければならぬゆえに、その詩人の作品のなかに、彼の個性が反映する以上は、そこに彼の國民性が反映せざるを得ないからである。「だが才能なくして、しかも國民的であろうと愆する者はつねに庶民的な、月並な詩人となるであろう。彼は國民の下層のあらゆる、いとうべき風景を、居酒屋、廣場、百姓小屋——一言で言えば、賤民たちの醜惡な状況を正確に描くであろう。しかしけつして國民の生活をとらえることもなく、國民の詩情を理解することもないであろう。」

(「テレスコープ誌發行者への報告」)

ここには國民生活の最も本質的なものの描寫についての、彼の文學理論の中心的な要求が提出されている。彼がプーシキンを國民的、民族的詩人とみとめるのはこの詩人が國民の思想と感情、國民生活の精神を表現し、民族の教養ある階級の最良の代表者が意識しはじめた國民の歴史的使命を表現したからである。プーシキンがオネーギンを自己の代表的な作品の主人公にえらんだのは、

このような先進的貴族の形象をつくりだすことによつて、時代の最も本質的な問題を提起するためであった。民族詩人は自己の作品のなかに國民大衆をその代表者とするところの基本的な、不偏の、規定しがたい、實體的な自然力をも、民族の最も教養ある階級の生活のなかに發展したところのこの實體的自然力の一定の意義をも表現する。民族詩人たることは——偉大な事業である——

(一八四四、「プーシキン論」第五論文)

右に引用した文章に直接先立つ部分で彼はつぎのように述べている。「……そのゆえにすべての人がプーシキンをロシアの民族的、國民的詩人と稱するのである。……われわれにはこれは半分だけ正しいものと思われる。國民詩人は、たとえばフランス人が自己のベランジェを知っているように、國民全體が知っている詩人である。民族詩人は、たとえばドイツ人がゲーテとシラーを知っているように、いくらかでも教養のあるすべての階級が知っている詩人である。わが國民は自己の詩人を一人として知らない……。それゆえ、この面から見るとならば、プーシキンにせよ、あるいはどんなロシアの詩人にせ

よ、これに《國民的》という形容詞をつけることはこつていであらう。」ここでベリンスキーはプーシキンの創作の本質について語っているのではない。なによりもまずロシア國民の貧困、無智、文盲の状態の克服の必要について、國民文學が國民的なものとして成立するための客體的條件をつくることの必要について語っているのである。

しかし國民性(narodnost)と民族性(natsionalnost)とのあいだの概念上の區別について語ることはこのことのほかにもう一つの意味をもっていた。彼はこの二つの概念を明確化することによって、文學の國民性を民族的規準として、また庶民性として理解しているスラヴ主義者の立場を打破すること、またこの立場を打破することによって國民性の概念にあたらしい内容、すなわち民衆性あるいは人民性ともいふべき要素をみちびきいれることを必要と考えていたのである。彼の國民性の概念におけるこの發展はのちに述べるように一八四〇年以後の彼の思想的發展のあたらしい段階におきる。それゆえ彼がこの問題についてはじめて書くのは一八四一年の論文

「ゴリコフ著『ビョートル大帝の事業』にたいする書評」においてである。

彼によれば、國民性と民族性との關係はいわば種と類との關係のごときのものであって、民族は國家のあらゆる身分の總計であり、國民は國家のひくい層である。國民は全體として民族を構成しないが、民族の概念のなかには國民もふくまれる。それゆえキルシャ・ダニロフの民謡集は、國民のすべての層にうけいれられるゆえに、國民的であるが、プーシキンの詩は、社會の最も教養ある層にしか理解されないゆえに、民族的な作品である。國民性は靜的な概念であり、民族性は動的な概念である。國民性は民族性の最初のモーメントであり、その最初の現われである。しかしこのことから國民性のあったところには民族性はなかったと考えるべきではない。民族は可能性のなかにあるが、現實のなかにはない。なぜなら民族性と國民の實體とはおなじものであり、あらゆる實體はまだ自己を規定しない場合にも、その規定の可能性をふくんでいるからである。それゆえ民族性は國民のすべての精神力の總計であり、國民の歴史は國民の民族性

「ベリンスキーにおける國民性の概念」

の果實である。庶民的なさまざまな要素もこれによって規定される。

一八四〇年のすえにベリンスキーはポトキンにあてた手紙のなかで現實との和解の克服について語り、否定の理念の推進を眞理への第一歩として語っている。さらにそのあくる年の九月には社會主義への改宗について語っている。これはロシヤ的農民的社會主義である。それまでの彼による國民性の理解の中心にあったものもつばら國民精神の表現としての文學の民族的個性の規準であったが、いまではこれとともに文學の全人類的内容が重視される。これはスラヴ主義の民族的閉鎖性にたいする批判をふくむと同時にロシヤの農奴制的現實にたいする否定を意味する。まえには彼は「國民の生活が獨自的なものであればそれだけ世界史におけるその役割は貴重である」と書いたが、いまでは「國民の生活によって表現される理念が一面的で、排他的で、限定的であればあるほど、かかる國民は人類の代表者と稱せられることがより少い」と書く。國民性の規準はより具體的な、民主主義的な内容をもつことになる。「文學的空想」のなかで出

された國民的文化と人類的文化とのむすびつきの問題は
あたらしい形で解決されなければならない。

「ロシヤ國民詩論」(一八四一)の第一論文のなかで、
彼は國民性を「全人類のなもの」という意味での「一般
的なもの」に對立させている。彼によれば全人類のな
ものとは、「普遍的な關心を構成し、すべての者の心をと
らえるもの、すべての者のなかに反響をよびおこし、す
べての者の行動の見えざることとして役立つもの」であ
る。文學における祖國愛の思想はすでに十八世紀の作
家、とりわけラヂーシチェフによって、そののちデカブ
リスト詩人およびプーシキンによってきずかれるが、こ
れはおもに民族的な規準にとらえられている。ペ
リンスキーはこれを全人類のなものとの結びつきにおい
て理解する。「自分の祖國を愛するということとは祖國の
なかに人類の理想の實現を見ることを熱烈に望み、力の
およぶかぎりその實現を助けることを意味する」(一八四
一、「レールモントフの詩」)。國民性はそれ自體としては一
面的なものであり、その反對の側面、すなわち全人類の
なものとの結合によってのみ眞實なものとなる。國民生

活のそとにある人間は幻影であり、また國民的性格をも
たず民族的相貌なき國家も幻影である。しかしその反
面において、國民が實體的、現實的でありうるためには
民族精神のみでは足りない。いずれの場合にも國民は一
面的であることをまぬかれないであろう。それゆえ文學
のなかに國民的なものだけを求める者は内容なき形式を
求めているのであり、また文學のなかに國民的なものの
完全な缺如を要求し、このことによって文學を一般的、
すなわち人類的なものとすることができると考えている
者は形式なき内容を求めているのである。かくて「全人
類的であると同時に國民的な文學のみが眞に國民的な文
學である。」すなわち、あたらしい國民性の概念は國民
的なものと全人類的なものとの統一によって形成される
のであって、全人類的なものが國民的なものにかわるの
ではない。

「ロシヤ文學についての感想と意見」(一八四六)のな
かでペリンスキーは書いている。「自己の天才がいたる
ところで、單にその同國人によつてばかりではなく、す
べての者によつて承認されることを望む詩人にとつて

は、民族性は第一の條件であるが、唯一の條件ではない。彼は民族的であると同時に世界的であることが必要である。すなわち彼の作品の民族性が全人類の理念の精神的な、無形の世界の形式であり、肉體であり、容貌であり、個性であることが必要である。」言いかえれば、民族詩人は自分の祖國にとって大きな歴史的使命をもっているばかりではなく、その活動が世界的意義をもつものでなければならぬということである。ここでベリンスキーは詩人の高さを規定する歴史的、民族的要因、詩人の才能と歴史的條件との關係の問題にふれている。「國民の生活が詩人に内容をあたえる。したがってこの内容の價值、深さ、廣さ、および意義は國民の歴史的意義によってきまるのであって、直接に詩人およびその才能によってきまるのではない。」

これはベリンスキーの「プーシキン論」(一八四三—四六)をつらぬく根本思想でもある。彼はプーシキンの天才を一八一二年の時代の國民精神の未曾有の高揚によって生み出されたものであり、この詩人を歴史的な生活の一定の段階におけるロシア國民のよき特質を表現した民族

ベリンスキーにおける國民性の概念

的國民的詩人と見ている。しかし四〇年代の文學のあたらしい課題は國民性のあたらしい一層具體的な内容を要求した。ロシア文學は農奴制の個々の惡徳の摘發からこの制度全體の否定にうつった。ゴーゴリの創作活動はロシア文學のこのあたらしい段階への移行を意味した。ベリンスキーは四〇年代のロシア社會にとってゴーゴリがプーシキンよりも一層重要な意義をもつ作家であり、時代の精神を一層多く表現した作家と考える。

三〇年代には彼はあきらかにシェリング美學の影響のもとに、時代というものは詩人の意識とはかかわりなく、作品のなかに客觀的に反映するものと理解し、藝術を「理想的藝術」と「現實的藝術」とに分けて、一方は藝術家の精神的世界を表現し他は藝術家の内面生活と關係のない現實生活を反映するものと考えていた(「ロシアの中編小説とゴーゴリ氏の中編小説について」)。そしてそのいづれに重きをおくべきかを決定することは困難であると語っている。彼は現實を正しく描くためには文學と國民生活との結びつきが必要であるとしているが、藝術の思想性の問題を解決することができなかった。四〇年代

にはいるとともに、彼は眞の藝術家はまわりの現實に無關心であることはできないと考へ、現實と時代の精神とへのつよい關心を藝術に要求する。彼はレールモントフの作品のいちじるしい主觀性をこの詩人の國民性の現われと見る。なぜなら「レールモントフの本性のなかには人類が宿っているからであり、彼の憂愁のなかにすべての者は自己の憂愁を見るし、彼の魂のなかにすべての者は自己の魂を見るからである。」(一八四一、「レールモントフの詩」)

一八四二年の諸論文、とりわけ「アポロン・マイコフの詩」「ボレジャーエフの詩」「批評論」等で彼は文學の國民性の問題と不可分のものとして思想性、現實性の問題を提出している。いまや詩人による現實の反映の過程は社會的現實の題材にたいする詩人の意識的な積極的な態度として考へられる。詩が成功するためには才能だけではなく、時代の精神の参加が必要である。詩人はもはや空想の世界ではなく、同時代の現實のなかに生きて、社會の豫言者として現實生活の提出する諸問題にこたえ、また醫師として、だれよりもさきに、國民の苦痛や

悲しみを見つけて、自己の作品によってこれをいやさなければならぬ。そして彼の詩が眞に藝術的であるためには、言葉の美しさ、感情の優美さのほかに、詩の眞の内容となり創造の原則となるところの思想が必要である。詩人がすぐれていればそれだけ多く彼の作品のなかには時代の精神が表現される。詩はつねに社會の歴史的發展の過程に従屬するものであり、「生活の意義と目的、人類の運命、生活の永遠の眞理」についての現代の意識と思考の藝術的表現である。それゆえ「あらゆる偉大な詩人はその苦惱と喜びの根源が社會性および歴史の基盤の上にふかく根づいていて、彼が社會、時代、人類の機關であり、代表者であるゆえに偉大なのである。」(一八四三、「デルジャーヴィンの作品」)

ペリンスキイのいう時代の精神とはなによりもまず農奴制的現實にたいする批判の精神である。ゴゴリの作品の意義は國民の利益に反するすべてのものを否定の光のもとに描き出し、そのことによって美しいものの肯定と理想へのあこがれを生み出したことにある。國民は現實生活を文學におけるその正しい再現を通して認識し文

學のなかに自己の理想の標示を見ることにつよい關心をもつ。文學は、それが時代の精神と國民のすぐれた志向を表現しその理想を創造するためには、國民の立場に近づかなければならない。それゆえ國民詩人たりうるものは國民的立場に立った現實生活の詩人のみである。

しかし國民的文學が、眞に國民的文學であるためには、國民に讀まれ理解されることが必要である。啓蒙および國民生活の改善の必要と同時に國民文學の形式そのものが問題となる。ペリンスキーはすぐれた藝術作品の最も重要な特質の一つは形式の單純さであると考へている。藝術のなかには一つとして不明確なもの、不可解なものがある。藝術の單純さはなによりもまずその明確さにある。これは藝術的、思想的素朴さを意味しない。反對にすぐれた藝術のみが單純に、かつ最大限の明確さをもつて最も複雑な現象を表現することができ。ペリンスキーはかかる藝術的單純さの能力を完全に驅使した詩人としてプーシキンをあげている。彼はカラムジーンのおもな功績を理解しやすい形式の創造、なによりもまず言葉の改良によって文學の讀者の範圍をひ

ペリンスキーにおける國民性の概念

ろげた點にあると考へていた。

スラヴ主義者は口傳文學を文學創造の理想とするが、ペリンスキーはさきに見たようにロシヤ文學が口傳文學の上に成長したのではなく、外國文學から形式と方法を借用することによつてはじまったものと思へている。彼によれば民衆によつて創造された歌謡はコリツォーフの詩よりも劣る。プイリーナや歴史歌謡はプーシキンの「婚約者」やレールモントフの「商人カラシニコフの歌」にくらべて美しさと迫力において劣る。これは口傳歌謡の美や力が國民精神と詩の個々の要素のみを反映しているにすぎず、完全な藝術作品であるために必要な統一ある普遍的な思想を缺いているからである。口傳詩は直接的な無自覺的な直感のわくからまだ出ていない國民意識を表現するのみで、そこには全人類的な思想がなく、それへのおぼろげな志向、その豫感のみがある。それゆえ口傳詩は藝術的な形式にまで高まることができ。そこで全人類的内容のみが藝術的形式のなかに表現されうるといふことになる。ペリンスキーは「未發達の社會の詩は詩的内容や詩的形式よりはむしろ詩的表現

においてすぐれ、……それゆえこれらの詩においては内容がしばしば愚劣であり、形式は法外なものであるとは言え表現はつねに詩的である」と考えている。彼は全人類のなものに國民的なものを從屬させる。國民性についての彼の理解からすれば、この二つのものの統一からのみすぐれた藝術が生まれるべきものであるが、この場合彼は、スラヴ主義者が口傳文學を國民文學と同一視して、ロシアの國民生活の後進性、口傳文學の素朴さを理想化し、ロシア文學をヨーロッパ的啓蒙からきりはなされた、せまい民族主義のわくのなかにとじこめることによって、ロシア文學の發達をさまざまにしているものと考へ、これにたいする批判として、國民性における全人類的なものの原則の優越性を主張したのである。そしてこの限りにおいてこのことは當時において歴史的意義をもつていた。^(五)

しかし一面において口傳文學にたいするペリンスキーのこのような理解は啓蒙主義者であつた彼による國民の歴史的作用の理解の仕方と關係をもつてゐる。「文學的空想」のなかで彼はつぎのように書いた。「頭が人間の

肉體のもつとも重要な部分であるのと同様に中層および上層の身分が主として國民を構成する。國民の最高の生活はその上層のなかに、あるいはもつと正確に言えば、國民の理念全體のなかに主として表現される。」この場合、國民の下層は「國民の全理念」の體現者としての啓蒙された個性の保護のもとにおかれる。この思想はおなじ論文のなかで彼が述べている國民と社會との分裂についての思想と矛盾するが、全體として見るなら、彼の中心的な主張はこの分裂の克服であり、彼が國民の上層と云っているのはその啓蒙された中間層であることがわかる。これは貴族インテリゲンツィヤの社會的、歴史的役割についてのブーシキンの理解と一致する。

晩年の論文「村の讀書」(二八四八)のなかで彼は國民についての自己の見解をくわしく述べている。彼は國民生活のあらゆる矛盾を考慮にいれることを必要と考へる。國民は本質においてつねに保守的、反動的な力である。ここに進歩の動きにたいする國民の反抗の原因がある。しかしまたこの保守的な性格のゆえに國民がひとたびうけ入れた歴史的發展の結果は不動である。國民は自

己に個有でないもの、したがって有害とみとめたものになに一つうけいれようとしなからである。それゆえに社會の進歩のためには、教養ある上層の人間と國民とのむすびつきが必要である。「國民のそこにある個人は幻影である。個人のそこにある國民も幻影である。一方は他によって條件づけられる。國民はあらゆる發展の生命力を保持するところの地盤であり、個人はこの地盤の上に生まれる花であり、果實である。」この見地からペリンスキーはボゴーデン、シェヴィリョフらの國民觀を批判している。彼らは「國民をさげすみ、國民は無智、粗暴な群集である」と考える。だがポトキンのような自由主義者、すなわち「誠實に國民を愛しこれに同情しながら……國民から何一つ學ぶことはない」と斷言している人々も大きなまちがいをしている。しかし一番大きなまちがいをしているのは、「國民は教養ある階級の教養を少しも必要としないのであって、教養ある階級によってただ精神的にそこなわれるだけだ」と考えている人たちである。これはスラヴ主義者である。「國民が行動において大きなちえと力とを示す瞬間がある。これは熱

ペリンスキーにおける國民性の概念

狂と激情の瞬間である。しかしこれらのまれな瞬間においても國民は善良でかつ殘忍であり、寛大でかつ報復的であり、人間であると同時にけだものである。」彼は國民を直情的な衝動的な力として理解している。そして歴史の基本的主體としての普遍的個性の積極的な活動が自働力のない大衆を動かして社會の進歩を實現するものと考えられる。この場合「普遍的個性」に國民とのむすびつきが要求されているが、この啓蒙主義的歴史觀の二元論をペリンスキーは生涯の終わりまでもちつづけた。しかし同時に彼は社會革命の必要を主張して、「人々はすこぶる愚かなものであるから、彼らをむりに幸福のところまでひっぱってゆくことが必要である」(一八四一年九月ポトキンあての手紙)と述べる。これは啓蒙主義の一つの極限であり、その否定に通ずる。

ロシアの農民意識のおくれた諸特徴を理想化し、忍耐、温順、宗教性をロシア國民に個有のものであり、ロシア的智力の基本をなすものとするスラヴ主義者の見解を批判して、ペリンスキーはロシア民族がつねに外敵とのたたかいによって自己の獨立を守ってきたのであつ

て、ロシア國民の歴史はたえまない反抗の歴史であることと強調する(一八四七、一八四六年のロシア文學觀)とともに、ロシア國民が「ふかく無神論的な國民」であり、「自己の救いを……文明の、啓蒙の、人間性の進歩のなかに求めている」ことについて、この國民のよき未來を約束する資質について語っている(一八四七、「ヨーロッパの手紙」)。

彼は國民の個性を不變のものとは考えない。そして文學における國民性をも歴史的に理解するとともに、ロシア文學の歴史を國民性の發展の見地から見て、その文學理論を國民性についての自己の概念の發展を中心に、これとの不可分のむすびつきのうちにきざじた。彼によれば、おのおのの國民は自己の現實生活の認識と改善と理想の創造を志向しなければならぬが、ロシアではこの任務はなによりも多く文學の上に課せられている。そしてペリンスキーはロシア文學が實際にこの方向において大きな成果をおさめてその歴史の意味と精神とをつくりあげつつあるものと考えていた。

(一) チモフェーエフによれば一八一九年にヴィヤーゼムス

キーがアレクサンドル・トルゲエフあての手紙で nationalité を narodnostj と譯すことを提案しているのが最初である。(Timofeev: Problemy teorii literatury, 1955, str. 156)

(二) タニスヤ Bursov: Voprosy realizma v estetike revoliutsionnykh demokratov, 1953, str. 15.

(三) プレハノフは三〇年代のペリンスキーの論文には一般に自己の論理構造の濫用と事實の輕視の傾向が見られることを指摘している。プレハノフはペリンスキーの思想發展の過程を三つの時期に分けている。第一期においてペリンスキーは「理想のために事實を犠牲にした」。第二期には「現實のために理想を犠牲にした」。第三期には「發展の理念を通して理想と現實との和解を志向した」。(Plekhanov: Soch. t. X, str. 242)

(四) ラヴレツキーはペリンスキーがロシア文學の發達過程についてかかる見解をもつにいたった原因を第一にペリンスキーによるピョートル一世の改革の過大評價、第二に十九世紀前半における古代ロシア文學研究の未發達によって説明している。(A. Lavretskij: Istoriko-literaturnaja konseptsija Belinskovo, Belinskij, istorik i teoretik literatury A.N., 1949, str. 87)

(五) ペリンスキーはしばしば論争において反對の極端に移ることを必要と考えた。彼自身のつきのような言葉がある。「なんらかの原則が極端に走って愚劣さにまで達して

いる場合に、それからぬけ出る一つの自然な道は——反對の極端に移行することである。」(一八四六年のロシア文

集] Belinskij. Poln. sobr. soch. 1956, t. X, str. 32.)
(一橋大學助教授)